

1.3 全国で始まっている地域の人々と海辺とのつながりの例と「里浜づくり」の理想的な姿

里浜の理想形は、海岸法の目的に謳われている「防護」、「利用」、「環境」の3つの海辺の役割が総合的に調整された結果、生み出される形と考えられます。従来のものづくり中心の海辺づくりの反省に立ち、地域の人々と海辺とのつながりの回復、密接化、創造を目指すことで、海辺を地域の人々の共有空間としてのコモンズとして認識できることが理想の姿です。この理想にいたるまでには、継続的な（永続的な）、里浜づくりの運動が必要です。

例えば、地域固有の資源「鳴き砂の浜」に価値を発見し、時代の潮流（リゾート開発など）に揉まれながらも、一貫してその保全に務めている琴引浜は、地域の人々にとって、海辺は大切な観光資源という共通意識であり、鳴き砂の浜を守る活動が、他の地域との交流、コンサートやシンポジウムなどの新しい文化を生み出しています。そのために、禁煙条例にみられるような、独自の海浜管理のシステムを生み出し、活動資金を海水浴シーズンの駐車料金により賄うなど、永続的な活動のベースが形成され、「防護」、「利用」、「環境」の3つの海辺の役割が総合的に調整されています。このように地域の人々と海辺とのつながりの回復、密接化、創造がなされ、海辺が地域の人々の共有空間（コモンズ）として認識されることで、「防護」、「利用」、「環境」の3つの海辺の役割が総合的に調整された姿が里浜の理想形と考えられます。

しかしながら、これらの3つの役割は、一般的にトレードオフの関係にあり、「防護」、「利用」、「環境」が望ましい姿で調整されることは難しい場合も少なくありません。このため、「里浜づくり」のアプローチの方法としては、1つの目的を達成するために、自らの海辺について活動を展開する場合もあり、このアプローチも、「里浜づくり」への第一歩と考えられます。まずは、第1歩を踏み出すことが重要であり、第1歩を踏み出さなければ「里浜づくり」は始まりません。

例えば、地域の歴史、自然、地域の人たちの生業を通しての海辺とのつながり、海辺の自然体験など環境保全・回復・創造を通しての海辺とのつながり、ビーチスポーツ・マリンスポーツなどの利用を通しての海辺とのつながり、そして、これらの組み合わせなど、可能性としては、多様な海辺とのつながりがそれぞれの地域であると考えられます。

また、高潮・津波などの災害の経験・記憶を持つ海岸、今後その危険性がある海岸では、これらに対する安全性確保の追求をコンセプトとした「里浜づくり」を検討することも第1歩となり得ます。

全国では、次ページに示すように、すでに、多くの取り組みが始まっています。これらは単一目的のものも少なくありません。単一の目的でさえ、長い年月をかけて活動している地域も少なくなく、それほど、「里浜づくり」は、時間と手間隙のかかるものですが、一方で、その達成の喜びは大きく、また、1つの目標を達成することにより、さらに、新たな目標を設定し、取り組むことにより、理想的な「里浜づくり」に近づいていくことになるのです。